
Pieces Blue ～人と人、善と悪、人の繋がり～

K.KAIL

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P i e c e s B l u e 〽人と人、善と悪、人の繋がり〽

【Nコード】

N 1 4 5 3 F

【作者名】

K ・ K A I L

【あらすじ】

P i e c e s B l u e というバンドでボーカル、ベースとしてそれぞれ活動している熱血漢の新城勇氣しんじょうゆうきとクールガイの中川光太郎なかがわこうたろう。そんな二人が一人の女性の浮ついた気持ちをつっかけに互いの価値観の違いをぶつけ合い関係を悪化させてしまうのだが…

勇氣編1話：就職と生活（前書き）

このお話は勇氣編↓光太郎編↓Pieces編という順番で読んで
いただけるようにお願いします！

勇気編1話：就職と生活

俺の名前は新城勇気！しんじょうゆうきこんなだがバンドでボーカルをやっている。

メンバーはギターの安斎浩一あんざいこういち、ベースは大親友の中川光太郎なかがわこうたろう、ドラムは浩一の幼馴染みの岡安圭一おかやすけいちだ！

俺たち4人は「Pieces Blue」ってバンドを組んで活動している。

おっとそうだ！それからもう一人紹介しなくちゃならないヤツがいたな。バンドで一生懸命頑張ってくれてるのが日比野玲子ひびのれいこ。

地方に住んでる子だからたま〜に東京まで出てきてってカンジなんだけどすごくいろいろやってくれてるんだ！

ちなみに玲子とは恋人同士でもある、もうすぐ3か月になるんだけどさ。

そんなこんなで話は地方に住む玲子がついに東京に出てきて生活を始めるってところから始まる。

「ねえ、勇気。実はね…うち…大変な事になったんだ。」

いつも楽しみにしていた電話での会話の途中、すっかり元気のない玲子がそう切り出した。

「そんなに落ち込んで… いったい何があったんだ？」

「実はね、うちの両親が離婚する事になったの、私はお母さんについていくことになるんだけど… お母さんは再婚するかもしれない相手がいるから私の居場所はないんだよね…」

前々から玲子の両親の不仲は知っていたけど… こんなに早く離婚って話になるなんて思ってたなかった。

正直その時の俺にはどうにもならないスケールの話だった。まだ年は19歳で実家暮らし、おまけにフリーターの俺。貯金なんてバンドと携帯代だけですっ飛んでしまうようなバイト代じゃ出来るはずもない。

かと言って今の玲子をこのまま放っておけるわけがなかった。そもそも玲子と知り合った時にあいつには地元で結婚を約束した彼氏がいたんだ。最初は俺の片思いだったんだけど… 思いが通じたのか結婚の話放棄してまで玲子は俺の元に来てくれたのだ。そこまでの気持ちをお互いが持つて始めた仲だった。

俺は悩んだ末に最後の手段をとることを決意したんだ。それは… 半年だけという条件で俺の実家に置いてもらう事。親には絶対に頼りたくはなかったが… これしか玲子を救う手立ては今の俺にはなかったんだ。

そしてある日、リビングで俺は両親に話を切り出した。事情を説明した後、頭を床に擦りつけて心のままに言った。

「頼む… 玲子をこの家に半年だけ置いてほしいんだ… 俺… 絶対頑張っつて金貯めて半年で家を出るから！」

長すぎるほどの沈黙の後、親父が言った。

「本来なら嫁入り前の女の子を置くなんて言語道断だが…では条件だ」

親父は認めてくれたがそこに1つの条件を提示した。

「今、田中社長のところで機械の技術員を募集してるそうだ。そこで必死に働く事だ。同棲なんてするなら結婚の意思があつてこそじやなければ認めないからな。結婚するためならおまえが玲子ちゃんを養つていかなければならないんだ、いいな？」

田中社長つてのは親父の最も尊敬する社長だと聞いた事があつた。前の会社で直属の上司だったとか…。前に田中社長の前で壊れたアンプを直した時に一度、就職の誘いをもらったんだけど俺はバンドがあるからそれを断り続けていた。しかし背に腹は代えられない。こうして俺は親父の言う条件を全て飲み、田中社長のいる「さくらメディカル機器」という会社に就職をしたんだ。

でもやっぱり機械技術はすごく難しかった。俺の持つてる技術なんてやっぱりお遊びみたいなものでさ、回路図も読めないしはんだ付けもなかなかうまく出来ない俺は怒られっぱなしだったし、機械が直らなくて朝まで現場に残ったりっていうのもさらにあつた。

それでも俺は玲子との将来を夢見てひたすら働いたんだ。

俺が働き始めて間もなく玲子はこっちにきてすぐ光太郎の職場のアルバイトとして雇用された。もちろん光太郎の圧力がかかつての事なんだけど。

長年の付き合いもあつてか光太郎は東京に不慣れな玲子の面倒をよく見てくれたんだ。

来る日も来る日もちゃんと俺にメールをくれた。「今日は……だったぞ。」ってな具合に。みんながみんなを信賴して……大変だったけどみんなが力を合わせて頑張っている時間だった。

そんな時、玲子の様子がおかしくなった。１７時に仕事が終わってるはずなのに帰りは夜２２時だったり……そんな生活態度に俺が注意する回数も日に日に増えていったんだ。

勇気編2話：歪と疑惑

珍しく早く帰ってきたのに今日も玲子の姿は見当たらなかった。携帯に電話しても繋がらない。そんな時に母親から一言ぽつりと言われた。

「勇気…ご飯の用意もあるからちゃんと玲子ちゃんの帰ってくる時間を教えてちょうだいね」

親にまでそんな事を言われてしまう始末だった。いくら半年の期限付きとは言えこんな状態が続けば玲子に対しての俺の両親の信頼やこの先の話に大きな支障をきたしてしまう。例によってまた22時頃に帰ってくる玲子に対して俺は少しキツめに注意をした。

「何でこんな帰りがおせーんだよ！親だって最近こう言ってきてるし…終わったならまっすぐちゃんと帰ってこいって！」

そんな注意が続いたが玲子の帰りの遅さはひどくなる一方だった。俺がこうして怒ってばかりなものだから玲子も面白くなかったんだろうか、ふてくされて先に寝てしまうこともしばしばあった。

悩んだ末にこのままではお互いにとってよくないと思い、俺は光太郎に電話をした。

「やあ…勇気。どうしたんだ？」

「いや…最近実はさ…」

俺は玲子の帰りが遅い事、そしてその時は毎朝毎晩どちらも光太郎

が一緒だと聞いていたので光太郎からも早く帰るように言ってほしいと頼んだんだ。これがベストだと思った。

「そういうことか、わかったよ。しかし玲子は仕事を一生懸命頑張ってくれてるぞ〜！なんだかんだで僕もお前には感謝しなければいけないかもしれないな。」

「今さら水臭い事言うなよ、かゆくなるっての！」

笑いながら俺は少し安心した。光太郎に任せておけばきっと大丈夫だと思えるのはやっぱりこの13年という長い付き合いの表れだろう。

しかしそれから玲子の行動が変わる気配は一向になかった。

そして珍しく玲子が早く帰宅した時の事だった。玲子がシャワーを浴びにバスルームへ向かった瞬間に彼女の携帯電話がけたたましく鳴り出した。どうやら誰かからのメールのようだ。

玲子が最近帰りが遅い事とこのメールに何か関連性があることは直感的にわかった。この時そんな事に感づかなければ幸せだったのかもしれない。

迷いつつ恐る恐る俺は玲子の携帯に手を伸ばした。俺が後から携帯を見たことを謝れるような未来を信じながら…

しかしそこにあつた真実は想像を絶するものだったのだ。携帯を開くとそこにあつたメールは玲子の母親からだった。

「そうか。しかし今度はベース君とはねー、まあいいけど帰ってきたらちゃんと紹介しなさいよ。」

…ベースって…まさかそんな事が…。

大きすぎる黒い疑惑に押し潰されそうになる。こないだまで電話でああやって何事もなく話していた光太郎に限ってそんな…。

一刻も早く疑惑を晴らしたかった俺は自分の携帯から玲子の母親に電話をかけたんだ。

「あら、勇気君！どうしたの？」

「お母さん…今のメールは…いったいどういう意味ですか…？ベース君っていうのは…」

俺の声も自然と低くなる。

「ああ…そ、それはね…あのこ…特に仲良くしてくれる男の子の話はよく私にするもんだから…あ、あははは…」

明らかに慌てているのがわかった。しかし俺はその電話を切った後に自分の感情を押し殺そうとしたのだ。光太郎が…まさか玲子の家族まで一緒になってそんな事…あるはずがない、あつてたまるかと。

悩む俺に、ついに地獄とも言える瞬間が訪れたのはそこから数日後の事だった。

勇気編3話：転落のラブソディ

いろいろな思いを必死に押し殺しながら俺は時間を過ごしていった。そして1か月も経ったある日のことだった。

俺が仕事から帰ってくると妙に部屋が片付いていたのが気になった。がその時は特に気にも留めなかった。むしろ片付けなんか今までやってくれた事なかったしそんな玲子に感心すらしていたんだ。

「玲子のやつ…こんなに綺麗に掃除して…なんだかんだいろいろ反省していたのかも…。今日はリハ（リハーサル）が終わったらあいつの好きなパフェをごちそうすることにしようかな」

そしてリハーサル開始の1時間前。そろそろスタジオに向かわなければいけないのに玲子は一向に帰って来なかった。何度電話してもメールをしても応答はなくしびれを切らした俺は仕方なく一人でスタジオに向かった。

「リハがある日は俺が帰ってくるより早く帰ってきて家で待ってるのに…おかしいな…」

そしてスタジオに着き、全員揃ったところで練習を開始したけど俺は歌に身が入らなかった。その理由はもちろん玲子の事だ。いつもいるはずの玲子がいらない不安が集中力を乱していたのは明らかだった。そして曲が終わったその後…

「ふう…ちょっと休憩…」

「勇気、どうしたんだ？玲子は今日は来ないのかい？」

浩一が心配そうに俺に尋ねる。

「ああ…帰ってもこないし連絡もつながらないし…なんだか心配でさ…。なあ、光太郎！お前何か知らないか？」

このメンバーの中で何か知ってるとしたら同じ職場である光太郎しかいないのは明白だった。しかし光太郎は首を横に振って答えた。

「僕もわからないんだ。本当にどこに行ってしまったんだろうな…」

「そうか…」

俺のテンションの低さが影響してしまったのかそこにいる全員が重苦しい雰囲気にもまれた。そんな中、俺の携帯が鳴った。

「この着メロは…」

それは紛れもなく玲子からのメールだったのだ。俺は慌てて携帯を手にしてメールボックスを開いた。

「やっぱり勇気とは一緒にいる事が出来ませんでした。私は今までいろいろな男の人を好きになってきましたがここまで後悔した出会いは初めてかもしれません、あなたはきっと私の自由を尊重出来ない最低の彼氏だったのかもしれない。あなたに言いたい事は山ほどあるけれどもうあなたに言葉をぶつけることはないでしょう。さようなら。」

読み終えた瞬間俺は持っていた携帯を取り落とした。

メールの文面の意味さえわからずただこの文字の羅列が頭の中をぐるぐると回っていく。そしてがっくりと膝をついた。メンバーたちは俺の様子を見て何が起こったかを一瞬にして悟ったようだった。

.....

.....

.....

.....

.....

そこからは沈黙。誰一人として口を開くやつはいなかった。放心状態の俺に誰も話しかける人間はいなかった。悠久とも思える時間が経ったと思ったその時に口を開いた人間がいた。

「……勇氣、おまえバンドや玲子のために……よく今まで耐えて頑張ってきたな……おまえはやるべきことは精一杯やったってオレは信じてるぜ。」

そう言ったのはギタリストの浩一だった。その言葉が沈黙と凍りついた時を破壊したのだ。

「勇氣……」

「……」

その時俺は狂ったように涙を流し叫び声をあげたんだ。

「みんな…みんな…すまねえ…すまねえええええっ…うわあああ
ああ…」

俺はその日から自分を塞ぎ込んでしまっていた。

しかしそんな俺に追い打ちをかけるような出来事が待っていた。1
0日程して俺に一本の電話がかかってきた。

「…勇気か？話がある。出てきてくれないか？」

「……光太郎……」

俺を呼び出したのは光太郎だった。

今まで付き合っていた女と別れた時は必ず光太郎に愚痴をこぼして
いた俺だったがこの時の光太郎はいつもとんだか様子が違った。
待ち合わせ場所につくと光太郎は唐突に俺に言い放った。

「玲子の事はもう忘れた方がいい。彼女がいなくなったのは明らか
におまえのせいだろう？」

「…確かに一理あるかもしれない…しかし…こんなのってありかよ
…」

俺は唇を噛みしめ涙をまた浮かべながら絞り出すような声で返した。

「悪はお前だ。そんなお前にはもうほとほと愛想が尽きた。おまえとはもう今日限りにさせてもらう。」

突然の言葉に俺は耳を疑った。

「おい…なあ…俺たちは親友じゃなかったのか…？それに玲子が突然いなくなつた事…おまえは本当に知らないのか…？」

「知らないと言っているだろう。それに親友？おまえが勝手にそう思っただけだろう？」

「光太郎…おまえ…。玲子が消えて…おまえまで…」

光太郎は冷たく言い放つとその場を後にした。俺は結婚を前提にした恋人と共に13年来の一緒に夢を追いかけた親友までも失ってしまったのだった。

その日から俺は寂しさを埋めるために女に溺れた。周りの女がどんなに美人でもどんなに愛してくれたとしても俺の心の傷は埋まらなかった。

そんな自暴自棄になつた俺を浩一や圭二は悲しそうな目で見つめていたのだろう。そんな信頼していた二人にさえバンドは続行不可能と判断され、ついにバンドさえもやめることになつたのだった。

俺はその年、生きがいの全てを失った。

勇氣編 4 話：発覚と制裁

光太郎は去った。そんな事実を受け止めきれない俺はある日渋谷でいつものように遊び相手の北山あすみ（きたやまあすみ）と麗らかなティータイムを過ごしていた。

「ねえ、勇氣！今日はあどこいく？」

「そうだな…今日は俺はやめたバンドのライブに行ってメンバーに貸してた機材を返してもらわないといけないんだ。」

今日は浩一、圭二と最後に会う日。俺が抜けた後に新規加入したベイスで合わせて3人でライブをやるらしいのでそこで貸し借りしていたものを全て返し合うという話になっていたのだ。

「じゃあそれまでは一緒にお昼寝しよおおね！」

と言った会話をしていた時の事だ。ファミレスのすぐ後ろの席から話し声が聞こえてきた。

「しかし…それ本当かよ？」

「ああ…中川さんはうまく女をたぶらかして幼馴染から奪ったんだってよ」

サラリーマンの二人組の何気ない会話が俺とあすみの耳に付いた。

「でも玲子さんって人だっけ？けっこう美人だったよなあ…光太郎先輩にはもったいないんじゃない？」

「おまえそれめっちゃ失礼だろ〜!」

俺は思わず立ち上がっていた。あすみも今までにない俺の表情に凍りついていた。

「…あんたらその話詳しく聞かせてくれねえか？中川光太郎と日比野玲子…この二人の話だな？」

俺の突然の言葉に二人組はおびえ始めた。そして次々に話を聞き出す事に成功した。

その二人は光太郎の会社の後輩だった事、玲子は家を出る1か月前から光太郎と関係を持っていた事、玲子の親もそれを了承していること。

「つまり…俺は嵌められたって事か…」

悲しみが少しずつ怒りに変わっていく。こんな事が許されていいのか…こんな事がまかり通っていいのか…。

この日のライブに光太郎が来る事があったら…容赦出来ない事を直感した。

あいつが来なければ…今日は平和に終われるのだ。そう思い込む事で自分をセーブしていた。

そして時間は夕方。ライブハウスに向かい、無事に貸し借りを済ませた俺。帰ろうとしたその時に目の前にいたのは…

光太郎と玲子だった。

あの二人の言っていた事は本当だったのだ、俺はこの胸の感情を抑え込む事が出来なかった。

「…ゆ…勇氣…。」

ここに俺がいる事は予想外だったのだろう。二人の表情が一瞬で凍りついた。そして俺の隣にいたあすみも怯えた様子で後ずさった。

「光太郎…おまえ…、全部お前の同僚から聞いたぞ…。玲子がいなくなる1か月前から関係を持っていた…そこから玲子がいなくなる手引きまで全部お前がしてたって事もな…」

そう言った直後の一瞬だった、俺は光太郎の人中（鼻の下）に一撃をぶち込んでいた。その瞬間抑えていた理性が爆発したような気がした。俺が俺じゃないようだった。

さらに倒れている光太郎に向かっていく俺。しかし呻く光太郎の前に玲子が立ちはだかった。

「勇氣！やめなよっ！！！！！！」

まるで付き合っていた当時と変わらぬその口調ですらその時の俺の耳には届かなかった。

「おまえも同罪だ、この娼婦が…」

自分でも信じられないほど残酷なほどの言葉と共に玲子を押し退けた。玲子はそんな俺に対しても抵抗をしなかった。そして光太郎を

目の前にし拳を振り上げようとした瞬間に無数の手足が俺に絡みつ
いた。

「…く…放せ！ちくしょおお！！」

手足が全く動かなかった。どうやら4～5人で抑えられたらしい。

「俺たちは…ダチじゃなかったのかよ…」

取り押さえられ我にかえった瞬間の俺の口からそんな言葉が漏れた。
本心だったのか何だったのか今でもわからないんだけどね。

そしてそのままあすみと共にライブハウスを出た。まあもちろん騒
ぎを起こしたので退場扱いだったんだけど…。

帰りの車の中、運転しながら涙が止まらなかった。これで俺は正真
正銘全てをなくした人間になったのだから。

あすみはそんな俺の手に自分の手を重ねてこう言った。

「あたしバカだけど全部を失くしちゃった勇気の新しい抛り所にな
れるように頑張るね」

そんな言葉に俺は泣く事をこらえられなかった。

勇気編終話：平穩からの転機

それから早5年の月日が経った。時間は心の傷をいやしてはくれたがトラウマはずっと消えなかった。それもまた時間が解決してくれると思った矢先、俺の携帯に見知らぬ番号からの着信があったのだ。

「はい、勇気ッス！」

「あ…あの…圭二ですけど…」

電話の相手はバンドをやめてから全く疎遠になっていたドラマーの圭二だった。

「圭二？バンドやめた俺にいったいなんの用だ？」

「実はこのたびPieces Blueをやめることになったんだ。」

「

正直とてもびつくりだった。あのバンドを圭二がやめるなんてありえない話だったから。そして圭二はドラムにここまで夢中になれたのは他ならぬ俺と浩一のおかげだと言ってくれたのだ。

そこからバンドとは関係のないところで浩一と圭二との時間が毎週出来るようになったんだ。それまでバンドから離れて友達付き合い合いをしたことなんてなかったから何とも新鮮だった！

音楽がなくても楽しい、音楽がなくなつて生きていけると思えたのは浩一と圭二、そして何よりあすみのおかげだと今でも思う。

なんだ、音楽がなくなつたつてこんなに楽しく生きていけるんじゃないか！そんな風にこの先も希望を見出していきたい…少しずつ俺の考えがポジティブに向かい始めたんだ。

もうないと思われていた無限回廊の迷路の中ついに光明を見つけたと思った俺。そんな俺にもう一度運命の転機が訪れる。

勇気編はここで終わりです。お話の続きはまずは光太郎編を見てからP i e c e s 編を読んでください！

光太郎編 1話：与えた微々たるダメージ

僕の名は中川光太郎。なかがわこうたろうベースを弾くことが何よりも好きなごく普通の20代のサラリーマンだ。とある事情で先日、バンドを抜けてきたところさ。

そのバンドというのが幼馴染である新城勇気しんじょうゆうきと始めたPieces Blueというバンドだ。

勇気は所謂、熱血タイプの人間だ。僕とはまるで正反対の性格だったせいかいろんな場所、いろんな人と知り合うきっかけになった。

というのも何より勇気は異性に人気のあるタイプだったからな。ちなみにベースを初めて弾く事なったのも最初、あいつに無理やりベースを持たされたからだ。でもそれがきっかけでベースにのめり込んだのだ。あいつといると退屈しなかったがそれも今となっては昔の話。

なぜなら僕は基本的に人を信じない。

もちろん勇気だって例外じゃないが今回のバンドを離れる事になったのはさすがに残念だった。

ギターもドラムも僕のベースの成長を精一杯後押ししてくれたからな。僕とは対照的に熱血タイプの勇気と僕が仲違いしたのは訳があつたんだ。その前にもう一人紹介しておかなければならない人物がいる。

僕の現在の彼女である日比野玲子ひびのれいこだ。彼女はつい先日まで勇気と付

き合っていて一緒に住んでいたんだがあいつの性格のせいで日に日に精神が弱っていく玲子を僕が見兼ねて助けた。

完全過ぎるほど波風を立てないように僕と玲子は愛情を育んだ。もちろん勇気も周りの人間も僕がこうして手助けした事は知る由もないはずなんだが…ともあれ今は僕と玲子がこうして一緒にいるというわけさ。

しかしバンドをやめてから僕という人間が変わっていくことになるなんてこの頃は全く思いもしなかった。

玲子を傷つけた勇気と決別する時だ。

「おい…なあ…俺たちは親友じゃなかったのか…？それに玲子が突然いなくなった事…おまえは本当に知らないのか…？」

「知らないと言っているだろう。それに親友？おまえが勝手にそう思っただけだろう？」

「光太郎…おまえ…。玲子が消えて…おまえまで…」

勇気が玲子を失ったショックで冷静な思考じゃなかったのが幸いした。

僕は勇気とバンドを切り捨て玲子や周りの友達と楽しく今までと変わらない生活を過ごしていくことになったのだ。

あいつの周りに女は絶える事がない。たとえそこで意気消沈したとしてもまた新しく女を見つけるだろう。あいつにせよ大したダメージではないはずだ。

光太郎編 2話：勇気の戯言

「ねえ、光太郎！今日はさ、帰りに池袋のミルクィウェイでパフェ食べていかない？」

電話口で玲子は今日も元気に僕を誘う。

「ああ、そうだな。行こうか」

僕らは周りからも公認のカップルになって今は何事もなく平穩に過ごしている。

もともと僕と玲子の関係は彼女が勇気と別れる1か月前から始まっていたのだがそれは一部の人間以外には公言していないからな。それも全てあいつが悪かったせいだ、因果応報というやつさ。

あいつが玲子を追い込みさえしなければ…。

それに女に不自由しないあいつの事だ。玲子の事なんかすぐに忘れてさっさと他の女にうつつを抜かしているに違いないだろう。

「そういえば、勇気がバンドやめたらしいの、聞いた？」

「…そうなのか？いや、あれからバンドの連中とは連絡をとっていないからな」

「それで結局あさつてにやるライブは勇気が抜けた状態でみんなでボーカルをとってやるんだって！」

「バンドのメンバーも勇気がどれだけ傲慢なのかがわかったんだろ
う。勇気がいなければバンドに遠慮する事もないしな」

「じゃあ、あさってせっかくだし見に行ってみない？」

「そうだな。あさってなら僕は仕事も休みだし…ちょうどいい」

前述の通りだが僕は勇気以外のメンバーに関してはこういう別れを
選んでしまう事をとて残念に思っていた。だからこそ勇気が消え
たバンドなら遠慮せずに見に行きたいと思ったのだ。そもそも消え
るのはあいつだけでよかったわけなのだから。

ライブハウスのある渋谷は職場からも至近。僕は当日の30分前に
玲子と待ち合わせをしていた。時間ピッタリに玲子は現われた。

「おまたせー！さ、行こー！どんなライブなのかすっごく楽しみだ
よね！」

そしてライブハウスに着くとライブはちょうど始まるところだった。
幕が上がりメンバーのレベルアップしたテクニクに舌鼓をうつ。
さすがだ…やっぱりあいつらはすごかった。

その日はそれでメンバーと話をして何事もなく帰るはずだった。し
かし…

最高のライブを見終わったその直後に眼前に現れたその人影の表情
は僕と玲子を凍りつかせるには充分なほどの恐ろしい殺気を纏って
いた。

「…ゆ…勇気…。」

「光太郎…おまえ…、全部お前の同僚から聞いたぞ…。玲子がいなくなる1か月前から関係を持ってた…そっから玲子がいなくなる手引きまで全部お前がしてたって事もな…」

誰かはわからないがこいつに全てを喋った人物がいた事を瞬時に悟った。

そう考えた刹那に勇気が頭を屈ませたその直後、僕の鼻から口にかけて大きな衝撃が走った。

「ぐ…うつうつ…」

僕はたまらず後ずさりうずくまった。あまりの痛さに動けなかった。

「勇気！やめなよっ！……！！！」

玲子が僕の前に立ち塞がり勇気に向かって叫ぶ。痛みをこらえて顔を上げると、勇気は玲子を押しのけて向かって来るのが見えた。

「おまえも同罪だ…どけよ！」

地獄の底から響くような声でそう言って華奢な玲子の体を押し退かせる。僕に近づいてくる。今このまま来られたら…と考えた瞬間に勇気の身体にいくつもの手が伸びるのが見えた。

「…く…放せ！ちくしょおおお！！」

ふと顔を上げるとギャラリーが勇気を止めにかかっていた。4人ばかりでようやく勇気は押さえつけられた。そして勇気は一滴の涙と

共に一言、僕に言った。

「俺たちは…ダチじゃなかったのかよ…」

いつもならバカバカしくて笑いとばしていたようなセリフだったのだが…。

そしてその帰り道、玲子は申し訳なさそうな顔をしながら僕に言った。

「光太郎…殴られたところ…大丈夫？ごめんね、守ってあげられなくて…」

「いや…僕の方こそこんな…無様なところを見せてしまつてすまなかつた。しかし…」

「えっ？」

「いや…何でもない…」

「…変な光太郎！でもちゃんと明日病院行かなきゃだめだよ！」

「あ、ああ…」

それでも僕を「友達」と言った勇氣の心情が全く理解できなかった。僕はあいつからすれば憎悪の対象以外の何でもない。

そして僕もあいつを憎んでいる。あの言葉に真実などあるはずがないのだと思っていた。

光太郎編3話：僕自身のリセット

それから僕は勇気の事も忘れあれから仕事とベースの練習に没頭していくつかのバンドに声をかけられるほどにもなった。自分の上達と人からの羨望の眼差しが心地よかった。

でも時折、バンドのセッションに参加しては思い出す事もあった。僕がこうしてベースを弾くきっかけは他でもないあの男、勇気だったということ。そしてそれを認めたくない自分との葛藤。

そんな考えが頭をよぎり始めてからか僕は玲子にも辛く当るようになっていた。もちろん玲子もそんな僕に対して冷ややかになってきていたのだ。気づけばもうあの時から5年の月日が流れていた。

「…ごめん、光太郎。今日は疲れたから先に帰るね…」

玲子のそっけなさもピークに達しているようだった。5年も付き合い続けていたので玲子から結婚という言葉もその間にちらほらと出ていたのだが僕はとてもそんな気にはなれなかったのだ。そんな時に決まって玲子は僕に言うようになっていた。

「あーあ…勇気は私と結婚して幸せにするって言うてくれたのに…
光太郎にはそういう気持ちはないんだね」

僕にとってそれは何より神経を逆撫でするセリフだった。勇気だつて？あんなヤツと引き合いに出される事がまずおかしいのだ。僕はあんな周りの見えない直情バカではない。

そもそも僕自身もおかしかったのだ。もう5年も前の話をここまで

気にするなんて…。

玲子が元は勇気の女だった事、ベースを弾き始めた時も傍らにはあいつがいた事、それだけなのにまるで今の自分自身の生き甲斐が全て勇気に掌握されてしまっているような…そんな気分が拭えなかったのだ。

僕は過去を断ち切らなければならない。そして自分の手で敷いたレールの上を歩いていかねばならない。自分自身が成長しなければ…もっと冷静に非情にならねば自分を取り戻せない。

そう決意が固まった日、僕は玲子が住むアパートのドアを開けた。

「やあ玲子。突然すまない。今日は大事な話があるんだ。今、時間いいかな？」

「…光太郎…。どうしたの？」

「大事な話というのは…僕たちの今後の事なんだ」

その時、僕は玲子の目を直視することが出来なかった。その目にはうつすらと涙が浮かんでいたからだ。

「…いつあなたからその話が出るかと思っていたの…」

「…僕では玲子を幸せにする事は出来ないだろう。すまない、これ以上言葉が出てこないんだ…」

「いいの。あのね、私好きな人出来たんだ。バンドやってて…ボーカルなんだけどさ…」

「まさか…」

まさか…玲子はいつと…？僕は一瞬でそう直感した。しかし、

「違うの、あの人じゃない。私を幸せにしてくれるって約束してくれた人…。だから私の事は忘れて光太郎は自分の信じる道を進んで私なんかよりその夢をサポートしてくれる人はきっといるはずだから…」

「…すまない…玲子…僕は…」

僕の視界が滲んだ。知らず知らずのうちに涙が流れていた。あの時、バンドと親友を投げうって手にしたこのたった一人の女性が今まさに自分の手から離れようとしているこの時に僕は涙を流していた。

僕の中でリセットボタンが押された瞬間だったのかもしれない。

光太郎編終話：気付いた過ち

僕は一人で自分の道を見つけ、過去と決別するために歩みだした。しかしそこから僕の棘の道は始まっていたのかもしれない。

仕事でのミスが続き上司からの信頼低下や部下からのプレッシャーがどんどん強くなる。

「光太郎！おまえ…こんな事も出来ないようじゃいよいよ左遷も視野に入ってくるぞ」

「…すみません。気をつけます」

こんな会話が繰り返される毎日になっていた。玲子がいなくなつて精神的な拠り所をなくしたせいだったのだろうか…その玲子が今は他の男と幸せな毎日を送っているという事実もまたいたたまれなかつたに違いない。

「僕は…どうしたらいいんだ…。玲子…やはり君と別れた事は…」

そんな時に携帯が鳴った。ディスプレイを見てみるとなんと勇気とバンドをやっていた時のギタリスト・浩一^{こういち}だった。

「よう、光太郎か？！オレだよ、浩一だよ！久しぶり！」

「ああ…本当に久しぶり。いったいどうしたんだ？」

「実はあれからバンドが解散しちゃってさ、ドラムの圭^{けい}について覚えてる？あいつと今たまにスタジオ入って遊んでるんだけどさ。もし

よかつたら今日スタジオいかね??」

「驚いたな…解散したのか…。そうだな、ぜひ行かせてもらおうよ」

気分転換にちょうどいいだろうと考えていた時だった。案の定、そのスタジオは楽しく過ごせたし何より僕のベースの上達に二人が驚いていたのもやはり気分がよかつた。そしてファミレスで三人で夕飯を食べたのだがその場でいろいろな話をした。玲子との事、仕事の事などだ。そしてその話題の最中に浩一から一番耳の痛い話を切り出されたのだ。

「なあ…オレたち実はあれからずっとまだ勇気と会ったりしてんだけどさ、おまえらそろそろ仲直りとかするつもりはないのか?」

「愚問だ。あんな単純なバカを相手に僕がなぜ和解をしなければならなんだい?」

そこで圭二が鋭く一言突っ込みを入れたのだ。

「オレや浩一は元よりずっとおまえと一緒にいた勇気を裏切って玲子と逢引して…今、玲子がその時と同じように他の男の元にいる…それを考えておまえは何も思わなかったのか?」

「…それは…」

圭二は尚も続けた。

「今回の玲子の新しい男はおまえの知らない相手だったからよかつただろう、でも勇気の時はその相手がおまえだった…おまえならそのショックに耐えられるのか?今でさえスランプに陥っているって

のに…親友が消えた…それも結婚前提の恋人とだ。あいつの未練は玲子じゃなくおまえにあるんじゃないのか？親友であつたはずのおまえに…」

「…」

僕はそれに対して何も返す言葉がなかった。玲子でさえもあいつにしたら今まであいつの遊んできた女と変わらない、フラれてもすぐ立ち直るだろうと思っていた。あいつが短い時間、ショックを受けるのは当然と思っていた。じゃあ僕は一体どれほどのショックを勇氣に与えたのだろう。そしてそれでもあの時僕に言つたあのセリフ…

「俺たちは…ダチじゃなかったのかよ…」

憎いはずの僕を殴りつけて…それでもその言葉を発した勇氣は…。

そう考えてようやく僕は気付く事が出来たのだ。悪いのは僕だったんだ…。

勇氣に大きすぎるショックを与えてしまった事、そしてあいつの言葉に嘘はなかった事。人を信じないなどと高飛車な理由をつけて信じる事から逃げていた自分自身に気がついたのだ。

その時僕は浩一にひとつの頼みごとをした。

結 束 編 1 話：再 結 成

その日、一番の電話は今や遊び相手でもある浩一からだった。勇氣はすぐに電話に出る。

「おう！勇氣だけど！」

「あ、勇氣？あのさ、おまえ今からこれねえかな？」

唐突な誘いに少し驚く勇氣だったがいつもみたいにまたゲーセンがパチンコにでも出かけたいのだろう。そうに違いないと思い浩一の誘いをOKした。

電話を切った後に浩一は言った。

「これでいいんだな？おまえ…あいつを呼ぶって事はそれなりに覚悟があるって事だよな？」

「ああ…もう一度殴られる覚悟はもう出来てる」

「勇氣は何て言うんだろうな、オレにはちょっとわかんねーや」

そんな会話が交わされている事はつゆ知らず、勇氣は待ち合わせの新宿にあるファミレスへと向かった。

入り口を開けて中に入る勇氣。そして見慣れぬ人間を見つけると表情がこわばった。

「おまえ…光太郎…」

「……………勇氣。」

とてつもなく張り詰める空気。それを割って入るかのように浩一が静かに話し始めた。

「Pieces Blue がなくなったのは…オレのせいだった。おまえたち二人がいなくなってからどんなメンバーが加入しても音も気持ちもまとまらなかった。オレの技量不足つてのもあるのかもしれないけど…誰でもなくおまえたちでなきゃいけないことがわかったんだ。」

圭二も続いて話し始めた。

「オレはもう玲子という一人の女のためにこんなに人間関係がこじれるのはもう嫌なんだ。そしておまえたちともう一度、音を鳴らしたい。その一心で今日この集まりを考えたんだよ。」

勇氣はこの雰囲気を壊す事は出来なかった。ただ黙って光太郎を睨みつけていた。そんな重苦しい雰囲気が続く中、光太郎が口を開いた。

「僕はおまえを始め誰も信用していなかった。13年付き合いがあるうとだ。でも…勇氣、浩一、圭二はそんな僕にさえ120%の信用を与えてくれた。玲子にしたって僕を信じてくれていた…そんなおまえから卑劣な手を使って玲子を奪いそして消えた。そしてそこから孤独を知った。そこから僕には後悔が生まれたんだ。」

勇氣が重い口を開いた。

「全部認めるんだな？で、殴られる覚悟くらいしてるんだろっな…」

「おまえの気持ちがそれですむのなら殺されたって構わないさ。僕のやった事は到底許される事じゃない…」

勇氣は少しの間、中空を見上げそしてふうつと息を吐いた。そして口を開いた。

「…ようやく戻ってきたな、おまえ…」

その一言で勇氣の心中を全員が察知したのだろう。

「不思議だな、あれほど憎んでいたおまえからこんな言葉が聞けるなんて…。まさかこんなふうにまた音を合わせる機会があるなんて…」

「じゃあ…オレたちPieces Blueは再結成だなっ！」

浩一は声高らかにそう言った。時を経てついにPieces Blueは再結成を果たしたのである。

結 束 編 2 話：玲子の中の革命

それからというもののバンド活動は順調に進み勇気と光太郎は仲違いする前よりも息の合ったコンビになっていた。そして各々の楽器の技術も数段上がっている事からバンドにおいて同じバンドマンからも客からも一目置かれるようなバンドに成長したのだ。

そんなある日のことだった。

光太郎がついに昇進したということで祝いにラーメンを奢ると約束をしていた勇気。ラーメンを食べ終わり光太郎と道を歩いていた時だった。

「いやゝまつさかおまえが25にして課長に昇進とはなゝ！どんな裏ワザ使ったんだよ？」

「裏ワザ？普通に仕事をこなしていたらいつの間にかそうなっただけの話さ。ん？なんだあれは？おい、勇気、あれはケンカか何かか？」

ふと光太郎が目の前 of 騒ぎに気がついた。若い男女が口論になっているようだ。

「んゝ… あ、あれは！？… 玲子…？！」

そこで男と口論になっていたのはあの玲子だった。

「スグル… あなたがそうやって全て台無しにしたんでしょ？！もったいないじゃない！その子のところに行けばいいじゃない！」

スグルと呼ばれた男はそこで顔つきが変わる。

「っるせーんだよ！おまえ一発やったからって彼女面してえらそうな事抜かしてんじゃねえぞ、コラ！！！！」

スグルは口論に打ち負けそうになり頭に血が上ったのか腕を大きく振り上げた。

「…あの野郎…！」

勇氣はそう言つて舌打ちをすると素早く二人の間に入った。すごい音がして勇氣は後ろのめりに倒れた。

「お…おい！勇氣っ！大丈夫かつ？」

光太郎は勇氣を助け起こす。勇氣は立ち上がるとスグルを睨みつけた。玲子は突然の仲裁者に驚きを隠せずただ啞然とするばかりだった。

「勇氣…光太郎…どうしてこんなところに…？それにどうして二人が一緒にいるの…？」

さすがに2対1では分が悪いと感じたのだろう。スグルは玲子に背を向けて捨て台詞を吐いた。

「おまえみてーな女はコリゴリだぜ、もう二度と連絡してくんじゃねーよバーカ！」

「コラ…てめえ待て…」

すっかりキレていたのであろう勇氣はスグルの肩を掴んだ。

そして10分後…

公園のベンチに座る勇氣、光太郎、玲子。気まずさからか誰も口を開かなかった。その沈黙を破ったのは勇氣だった。

「まったく…力の加減も知らずに揉めるからあんな危ない目に遭うんだよ。おい、光太郎！もう十分休んだろ？帰ろうぜ！」

「ふう…わかったわかった。しかしあの男をあんなになるまで殴る事はなかっただろうに…。玲子、まあそういうことだ。気をつけてな」

振り返り玲子と目も合わせようとせず、その場を立ち去ろうとする勇氣。そして後を追うように光太郎も玲子に一言そう言った後歩き出した。

「ちょっと待つてよ！！！！！！！！！！」

玲子のあまりに大きな声に二人とも歩みを止めた。

「…どうして？どうして私を助けたの？勇氣…私が殴られたらあなただって気分いいはずでしょう？私はあなたを裏切ったんだから！」

しかしその言葉を受けて勇氣はまた歩き始めながら言った。

「関係ねえよ、揉め事見かけて間に入ったらお前がいたってだけの話だ」

玲子は勇気と光太郎の二人が見えなくなるまでその後ろ姿を呆然と見ているだけだった。

そしてその帰路の途中に光太郎は勇気に一言言った。

「全くおまえはいつでも誰かのスーパーヒーローだな」

「うつるせー！ああゝ殴られ損だ今日は！」

「…あれだけ仕返ししたのに？」

そんな会話が繰り返されている中、まだ公園に佇んでいた玲子の頭の中にもまた革命が起き始めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1453f/>

Pieces Blue ～人と人、善と悪、人の繋がり～

2011年10月4日22時09分発行